Mem. Fac. Fish., Kagoshima Univ. Vol. 27, No. 1, pp. 173~182 (1978)

鱗動進行波による推力発生の可能性について一Ⅱ

中山 博*·奈良迫 嘉 一*

On the Thrusting-Occurrence-Possibility by the Movement of the Scale Plates -II

Hiroshi NAKAYAMA and Yoshikazu NARASAKO

Abstract

By the model experiment it was ascertained that it was possible to bring forth a thrusting-force through the movements of the scale-plates opening slowly and shutting quickly; but it seems that no examination has been done yet on the living fishes.

This time, using carps, we made a few microscopic samples of sliced skins, to study the structure of scale-plates-cusps and to confirm the opening and shutting possibilities of the scale plates.

Using 16 mm camera, we filmed the surface of the fish-body (the series of scale plates) and visualized the flowing on its surface by the hydrogen-bubble method, and examined the thrusting-occurrence-possibility from the biological and physical points of view.

In case of carps, the results obtained are as in the following:

(1) Considering from the results obtained in the biological study it seemed that the scale-plates-cusps were not in independent and separated states, but were restricted by the tissues around the scale plates, therefore it was assumed that no wiggling of the fish-body caused the opening and shutting of the scale plates.

(2) Considering from the results obtained in the physical study, it was ascertained that there was a series of slipping of scale plates along the fish-body-axis at the time when the fish was swimming.

In case of the swimming fish with the body-length of $35 \,\mathrm{cm}$, apart from the swimming speed, the value of the slipping of scale plates was noted to be constant (at the mean value $0.9 \,\mathrm{mm}$) from the midship of the fish body to the back-end of the dorsalfin.

By visualization, it was ascertained that the flowing on the fish-body-surface showed a sort of laminar flow but, owing to the visualization limit of the hydrogenbubble method, it was almost impossible to confirm the flowing state upon the fishbody-surface under the high speed flowing.

(3) In the experiment in which some amount of ink was dropped on the surface of the scale plates of the fish anesthetized on the dish, at the back-side of the scale-plate there was some attachment of blue-ink noted, both in the resting and in the wiggling states of the fish, which was in contradiction with the biologycal result described above.

Therefore, it was assumed that concerning the possibility of thrusting-force-occurrence, further physical and biological studies of the epidermis would be necessary.

^{*} 鹿児島大学水産学部 漁船工学研究室 (Laboratory of Engineering of Fishing Vessel, Faculty of Fisheries, Kagoshima University)

1. 緒 言

魚の遊泳抵抗減少の要因の一つとして¹⁾ 側面進行波の発生が挙げられるが、この場合、関連 して鱗板の開閉運動が考えられる. 既報²⁾ で述べたように鱗板の quick return 運動 (緩開急 閉運動) による推力の発生は模型実験的には確認されたが、このような現象が果して生魚の場 合も認められるかはなお疑問である. 推力の発生が予想される魚体鱗板部の構造については、 之迄発表された文献³⁾⁴⁾ によると鱗板先端部が互いに独立遊離している場合 (**Fig. 1 (a**)) と 独立遊離していない場合 (**Fig. 1 (b**)) の二つが考えられている.

本実験では, 鯉の皮膚断面の顕微鏡標本を作成し, 鱗板先端部の構造と鱗板開閉運動の可能 性を調べ, 同時に魚体表面(鱗板部)の 16 mm 撮影と表面の流れを水素気泡法によって 可視 化, 推力発生の可能性を生物学的・物理学的に調べてみた.



Fig. 1(a) Section of fish skin. Source: General Biological Supply House. (from E. Lagler. E. Bardach. R. Miller 1962, ICHTHYOLOGY)



1. Epidermis 2. Dermis 3. Subcutis 4. Muscle 5. Mucous gland 6. Scale 7. Pigment cell (chromatophore)

Fig. 1(b) Section of fish skin. (from K. Matsubara A. Ochiai T. Iwai 1970, *ICHTHYOLOGY* (Vol. 1))

実験装置と方法

顕微鏡標本の作製

鯉の遊泳中, 静止状態及び最大くねり状態(8mm 撮影及び肉眼観察によると尾から体長の 1/3 付近を中心として, くねり角度が最も大きく約 35°)を想定, 夫々, パラフィン法, セロ イジン法, 氷結法⁵)により鯉の皮膚断面の顕微鏡標本を作成して鱗板先端部の解剖学的構造を 顕微鏡写真で調べた.

標本の作成には体長の尾から 1/3 付近 (最大くねり点), 1/2 (魚体中央部), 2/3 付近 (胸 鰭上部)の3個所, 夫々, 側線を中心線として上下対称に横(体軸方向)約1.5 cm, 縦1.0 cm の矩形状の皮膚を切り取った.

側線部を選んだ理由として、①魚体の曲率が最も大きく、くねり運動の際に最も鱗板開閉の 可能性が大きい. ②鯉の鱗板の厚さをマイクロメーターで測定した結果、 側線部分が背、 腹側 の鱗板よりも厚く quick return 運動(単純に開閉するのではなく、 ある程度の硬さを持つ鱗 板がゆっくり開いて早く閉じる)の可能性が強い、の二点からである・

魚体表面の流れ

本学回流水槽内に流体力学的に遊泳方向を拘束した鯉の運動場を設置し実験を行なった. 構造は Fig. 2 に示す様に側面と天井の板は透明アクリル板を使用, 上面及び側面より観察できるようになっている. 底板は可視化(水素気泡法)のため黒く塗ってある. 運動場の天井板はのぞき眼鏡も兼ねて居る. 運動場内に全長 35 cm の鯉を入れて, 流速 0.208 m/sec, 0.313 m/sec, 0.443 m/sec の三段階における遊泳状態を上方及び側面後方より, 鯉の全身と部分の拡大



Fig. 2 Experimental apparatus (Swimming pool of fish)

撮影 (16*mm*, 64 frame/sec) を行ない, 鯉のくねり運動による 鱗の動き (ズレ及び 開き) を調べた (**Fig. 3** 参照).



Fig. 3 Points where scale-slippings were measured.

次に魚体表面(鱗板部)の流れを可視化する目的で水素気泡法を用いて実験を行なった⁶⁾. こ れは仮に鱗の開閉運動が存在するとすれば、魚体周縁の流れ(流向,流速)に何らかの影響が ある筈で,鱗の開閉及び推力発生を間接的に証明できると考えたからである. 水素気泡を観察 する場合,観察方向と照明方向とのなす角が気泡での反射・屈折光の集中する 90°~145°位が 望ましく運動場の上下位置はこの条件によって決定される. 陰極線に直径 0.5mm の白金細線 を用い,これを5mm 間隔にキンク状に曲げて,運動場の前方7cm,水深10.5cm の所に水 平に設置した. 水素気泡法では直流高電圧を印加するため、これによる鯉の感電防止を考え、 運動場周囲の四隅に裸銅線 1.2¢(陽極)を張り,運動場内が等電位になるように設定した. 電源には可変直流定電圧,定電流電源装置(PAD 110-5)を使用した. 印加電圧は DC100 V,0.3 A. 写真撮影及び 8mm 撮影の場合,流速0.122m/sec, 0.167m/sec で, 16mm 撮 影の場合,流速0.208m/sec で実験を行なった.

更に補充実験として、青インクの滴下実験を行ない、静止状態に対しては、カルバミン酸エ チル(ウレタン)5%水溶液中に供試魚の鯉を入れて麻酔させ、仮死状態になってから平らな 容器に入れガラス管でインクを体表に滴下して体側を染める. また最大くねり状態に対しても 前と同様、麻酔させてから供試魚にインクを滴下、そのあとくねり運動を強制的に数回行なわ せ、数分後インクが乾いた所で鱗板を抜き取り、顕微鏡により鱗板裏側へのインクの付着状態 を検査、更に写真撮影を行なった.

3. 実験結果及び考察

先づ、生物学的検討の結果であるが、鱗板先端部の解剖学的構造は Fig. 4 (a) にその一例

を示すように, 遊泳中静止状態で鱗板先端部を表皮が包み, 完全に水の入り込む事を防止して いる. また, くねり状態に対しても Fig. 4 (b),(b)' に示すようにパラフィン法, セロイジ ン法, 氷結法の何れの場合も静止状態と同様, 鱗板先端部は互いに独立遊離の状態にはない.

総括すると、その構造は Fig. 8 に示す如く、互いに独立した状態ではなく(Fig. 1 (b))、 また鱗板に そって 表皮が 真皮の中まで 入り込んでおり(Fig. 1 (a)) 両者の 折衷状態であ る.



Fig. 4(a) A microscope photograph

(Skin section of the carp photographed at the part near the caudalfin with the length of 1/3 of the total length)

Rest condition (Freezing method)

Fixation: 10% Formain, Stain: Hematoxyline, Magnification: \times 35.



Fig. 4(b) A microscope photograph

(Skin section of the carp photographed at the part near the caudalfin with the length of $1\!/\!3$ of the total length)

The convex-side of the wiggle

Fixation: 10% Formalin, Embedding: Celloidin, Stain: Hematoxyline, Magnification: $\times~90$



Fig. 4(b)' A microscope photograph (Skin section of the carp photographed at the part near the caudalfin with the length of 1/3 of the total length)

The concave-side of the wiggle Fixation: 10% Formalin, Embedding: Celloidin, Stain: Hematoxyline, Magnification: $\times~90$

この事からくねり運動中の鱗板先端部は、周辺組織の拘束を受けて、 模型実験の場合のよう な独立遊離した緩開急閉運動を行なうことは無理と考えられる.

次に物理学的検討の結果であるが、本学回流水槽における 16 mm, 64 frame/sec 撮影におけ る測定結果を Table 1 (a), (b) に示す. 上面及び側面後方からのいずれの場合にもくねり 運動による鱗板の開閉運動は認められず, 鱗板間相互の体軸方向へのズレが認められた. 即ち Fig. 3 に示す如く背鰭付根から下方へ 4 列, 頭から 19.5 cm の所の鱗を中心として体軸方向 へ連続した 7 個 (a-g) の鱗について Fig. 5 の如く鯉のくねりの状態 10 段階 (1~10) に 対応⁷⁷ し, その動きに対するズレの量を調べた. その結果, 7 個の連続した 鱗のズレは体長 35 cm の場合, 流速に関係なく平均 0.9 mm であった (Fig. 6 参照). また背鰭付根から下方 5 列目で頭より 14.5 cm の位置の鱗と 背鰭付根から 下方 3 列目で頭より 25 cm の位置の鱗の ズレは, 夫々平均 0.3 mm, 0.9 mm であった. これは明らかに頭部付近でのくねりの量が 小 さい事を示している. 鱗板のズレによって境界面に何らかの変化が 生じていることは想像に難 くないが今後の検討が望まれる.

流速が 0.208 m/sec, 0.313 m/sec, 0.443 m/sec と増加しても鱗のズレの量には余り 変化 が 認められない. 之は流速が増加しても鯉のくねりの毎秒ビート数が多くなるだけで、くねりの 振幅は変らない事を示唆している.

また流れの可視化実験では魚体表面での流れの剝離はみられず水素気泡はなめらかに魚体表面に膚接して流れており、気泡が尾鰭近くにくると鯉のくねり運動により魚体近くの気泡は拡散し測定は不可能であった(Fig. 7,7' 参照). 今回はトレーサーとして水素気泡を用いたが、この方法では使用流体である水を直接に電気分解してトレーサーを作り出すこと、電気的に制御が容易なことなど、多くの優れた点があるにもかかわらず直流高電圧を使用するため、実験魚を感電させる恐れがあること、また魚自身気泡を避けて泳ぐ性質があることなど生物実験用の

Flowing	Steps of wiggling motion	Measuring points								
velocity m/sec.		a (mm)	b (mm)	c (mm)	d (mm)	e (mm)	f (mm)	g (mm)		
	1	5.8	6.2	6.7	6.8	6.9	6.0	7.1		
	2	5.6	6.0	6.7	7.0	6.9	6.2	7.1		
	3	5.9	6.4	7.0	6.8	6.9	7.1	7.0		
	4	6.5	6.6	7.5	6.8	7.3	6.9	7.4		
0.208	5	6.4	6.8	7.4	6.8	7.3	6.8	7.2		
	6	6.5	6.8	7.5	6.8	7.3	7.2	7.2		
	7	6.4	6.9	7.7	6.8	7.8	7.3	7.7		
	8	6.6	7.0	7.6	6.6	7.7	7.2	7.6		
	. 9	6.1	6.6	7.2	6.7	7.2	7.3	7.4		
	10	5.6	6.6	7.1	6.6	6.6	6.9	6.7		
	1	6.0	5.8	6.8	6.7	6.6	6.5	6.9		
	2	5.6	5.8	7.0	6.7	6.7	6.1	6.7		
	3	5.7	5.8	6.9	6.9	6.6	6.7	6.9		
	4	6.3	6.4	7.3	7.1	6.7	6.6	6.9		
0.313	5	6.2	6.6	7.3	7.4	7.0	7.5	7.1		
	6	6.8	6.7	7.6	7.2	7.2	7.2	7.6		
	7	6.9	6.6	7.6	7.0	7.6	7.5	7.9		
	8	5.9	6.5	7.3	7.1	7.2	6.8	7.7		
	9	5.8	6.2	7.3	6.9	7.4	7.0	6.7		
	10	5.9	6.1	7.3	6.8	7.1	6.7	6.5		
	1	5.6	6.0	6.4	6.6	6.8	6.4	6.9		
	2	5.6	6.2	6.7	7.1	6.8	6.3	6.5		
	3	5.6	6.2	6.6	6.8	7.0	6.3	6.8		
	4	6.0	6.1	7.0	7.1	7.2	6.4	6.8		
0.443	5	5.9	6.7	6.9	7.2	7.2	6.6	7.0		
	6	6.2	6.7	7.0	7.5	7.3	6.9	7.4		
	7	6.4	6.5	7.6	7.7	7.6	7.0	7.2		
	8	6.0	5.8	7.3	7.3	7.0	6.9	7.1		
	9	5.9	6.2	7.0	6.9	7.2	6.8	7.0		
	10	5.8	6.1	6.8	7.0	6.7	6.6	7.0		

Table 1(a). Length of scales along the body-axis at each flowing velocity.



Fig. 5 Steps of wiggling motion.

Measuring points	0.208 (m/sec.)		0.313 (m/sec.)		0.443 (m/sec.)		Mean		
	max. (mm)	min. (mm)	max. (mm)	min. (mm)	max. (mm)	min. (mm)	max. (mm)	min. (mm)	
a	6.6	5.6	6.9	5.6	6.4	5.6	6.6	5.6	
, p	7.0	6.0	6.7	5.8	6.7	5.9	6.8	5.9	
с	7.7	6.7	7.6	6.8	7.0	6.4	7.4	6.6	
d	7.0	6.6	7.4	6.7	7.7	6.6	7.4	6.6	
́e .	7.8	6.6	7.6	6.6	7.6	6.7	7.7	6.6	
f	7.3	6.0	7.5	6.1	7.0	6.3	7.3	6.1	
g	7.7	6.7	7.9	6.5	7.4	6.5	7.7	6.6	
h	7.3	6.9	8.0	7.6	7.8	7.6	7.7	7.4	
i	6.8	6.1	7.3	6.2	7.3	6.3	7.1	6.2	

Table 1(b).	Length	of	scales	along	the	body-	axis	at	each	flowing
velocity. (maximum, minimum and mean)										

トレーサーとしては余り適当とは云えないようである.

最後に補助的に行なったインクの滴下実験では静止状態及びくねり状態何れの場合も, 夫々 の個所の鱗板裏側へ青インクが付着していたが, この事は顕微鏡標本の結果と矛盾する. 鱗板 を抜き取る時に青インクが充分乾ききっていなかったため, インクが多少裏側へ流れ込んだも のか,或いはインクが表皮に浸透したものかとも考えられる.

然し表皮の防水性*)等を考えると、なお今後の検討が必要であろう.

4. 結 論

A. 生物学的検討

鯉の鱗板先端部の構造は顕微鏡標本の結果 Fig. 8 に示す如く, 互いに独立遊離した状態で はなく, また鱗板にそって表皮が真皮の中まで入り込んでいる. 従って, 鯉の鱗板先端部は周 辺組織の拘束を受けて, くねりに伴う鱗板自身の開閉運動は難かしいと考えられる.

B. 物理学的検討

くねりの外側体表での鱗の開きはみられないが, 鱗板相互間には体軸方向に対し, 後方への ズレがみられ, その値は(体長 35 cm の場合)流速に関係なく魚体中央より後方背鰭付近ま で体軸方向にほぼ一定(平均 0.9 mm)であった.

また魚体表面の流れは剝離がなく 層流であることが認められたが, 水素気泡法の限界から高 速状態の確認がなお不充分である。

インクの滴下実験では 静止状態及びくねり状態何れの場合も 鱗板裏側への青インクの付着が みられ、上記生物学的検討結果と矛盾した.

従って, 推力発生の可能性については更に今後表皮の生物・物理学的検討が必要であろう.



Fig. 6 Length of scales along the body-axis at each flowing velocity. (maximum, minimum and mean)



V: 10.4cm/sec., E: 100volt. I: 0.3amp., Pt: 0.5\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$, ASA 400, 1/60.Fig. 7 Flowing visualization around the carp by hydrogen-bubble method.



V: 10cm/sec, E: 80volt, I: 0.2amp., Pt: 0.3ø, ASA 400, 1/60.
Fig. 7' Flowing visualization around the carp by hydrogen-bubble method.



Fig. 8 Section of the carp skin.

文 献

- 奈良迫嘉一(1976): 遊泳魚体の低抵抗性に関する基礎的研究. 鹿大水紀要, 25, 51-169.
- 2) 中山 博・奈良迫嘉一・黒木敏郎(1977): 鱗動進行波による推力発生の可能性について. 鹿大水紀 要, 26, 191-204.
- Karl F. Lagler · John E. Bardach and Robert R. Miller (1962): "ICHTHYOLOGY", 108-120.
- 4) 松原喜代松·落合 明·岩井 保 (1970): "魚類学(上)", 35-41 (恒星社厚生閣, 東京).
- 5) 田中克己・浜 清(1977): "顕微鏡標本の作り方", 47-128 (裳華房, 東京).
- 奈良迫嘉一(1975): Active Skin Model の抵抗試験と流れの可視化.東京大学宇宙航空研究所,流れの可視化に関するシンポジウム, 3, 131-134.
- 7) 柳田為正訳 (1963): James Gray "動物の運動", 29-31 (岩波書店, 東京).
- 8) 川本信之 (1966): "新版魚類生理生態学", 311-313 (恒星社厚生閣, 東京).